

Title	ワルラスの経済思想 - 一般均衡理論の社会ヴィジョン(Abstract_要旨)
Author(s)	御崎, 加代子
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	1999-07-23
URL	http://hdl.handle.net/2433/181288
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

氏名 御崎加代子
 学位(専攻分野) 博士 (経済学)
 学位記番号 論経博第240号
 学位授与の日付 平成11年7月23日
 学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当
 学位論文題目 ワルラスの経済思想
 ——一般均衡理論の社会ヴィジョン——

論文調査委員 (主査) 教授 八木紀一郎 教授 根井雅弘 教授 田中秀夫

論文内容の要旨

本論文は、経済学における一般均衡理論の樹立者であるレオン・ワルラスの生涯と学説を対象とした経済思想史的研究である。シュンペーターのように、ワルラスの理論（一般均衡理論）と彼の社会改革構想はまったく無関係だという意見もあるが、ワルラス自身は、「科学的社会主義者」と自称したように、経済学と社会主義を結びつけることを生涯にわたって探求した人間であった。『純粋経済学要論』で扱われた一般均衡理論は、ワルラスにとって、「純粋経済学」「応用経済学」「社会経済学」という三層からなる経済学体系の一部であった。本論文は、ワルラスの一般均衡理論＝「純粋経済学」が、財産制度（土地国有論）や租税制度の改革論をも含む彼の経済学体系の基礎であったことの意味をつきつめるために、彼が描いた「一般均衡理論」に対応する「社会ヴィジョン」を探求する。

序章では、ワルラスにおける科学とイデオロギー（社会主義）、ワルラス理論は静態か動態かといった論争史をふまえて「ワルラスを思想として読む」というアプローチの仕方を打ち出す。第1章は、青年時代、父オーギュストとの関係、ローザンヌに招聘されるまでのジャーナリズムや「アソシアシオン（協同組合）」運動との関係、ローザンヌでの学究生活、そして晩年までのワルラスの生涯にあてられているが、これは付録として訳出されている「ワルラス自伝資料」と合わせて読まれるべきである。

第2章は、これまで多くの批判にさらされてきたワルラスの「企業者」概念の正確な理解が彼の一般均衡理論の理解の鍵であることを力説する。学位請求者によれば、「ワルラスは、生産用役を何ら所有しない企業者という超越的な階級を生産用役市場にあてて置くことによって、それを軸として、地主・労働者・資本家という三階級を、全く等質な経済主体として扱うことができるようになり、また同時に企業者に生産物市場と生産用役市場の媒介をさせることによって、生産用役の価格決定が、生産物と同じ原理で説明できるようになると考えたのである。」(47ページ) いかえれば、「企業者」は市場への対等な参加という「平等の理念」を表現するための「理論上のフィクション」(同)である。この章では、さらに生産における「効率」の追求を課題とした「応用経済学」の領域にまで筆を延ばし、ワルラスの理論が国家がただ一人の企業者になるという「企業者国家」の構想も含んでいたことを示している。

第3章は、ワルラスの「純粋経済学」は父オーギュストから受け継いだ進歩する社会の「価値変動の法則」を厳密に証明することを目標としていたという理解にもとづいて、ワルラスの「階級」把握のイギリス古典派との差異を示す。価値論と分配論をより一般化して統合しようとしたワルラス理論の基礎には、機能的な「階級」把握が存在していて、それは各人が三階級の機能をあわせもつことができるという種類のものである。学位請求者は、「純粋経済学」が分配における「正義」を追求する社会改革の構想に結びつきうる根拠をこの機能的な階級観にみている。

第4章と第5章は、青年時代に参加した「アソシアシオン（協同組合）」運動の理念が、ワルラス理論においても引継がれているという観点にたつて、「純粋経済学」の方法と「社会ヴィジョン」を論じる。ワルラスの「絶対的自由競争」という「仮説」は、社会主義者と自由主義経済学者のあい対立する市場観を斥けて、市場への対等な参加という「アソシアシオン」運動の理念を、科学的（価値中立的）に基礎づけるものであった。他方、結合された貯蓄を投資につなげる「アソシアシオ

ン」は、「組織された信用市場」のモデルとも見ることができる。「進歩する社会」のもとでは利子率が低下して、資本家と労働者の同化が促進されるという議論についても、学位請求者はそれが「アソシアシオン」運動の理念に合致すると見ている。

第6章は、「進歩する社会」の分析を目標にしたワルラスがなぜ一般均衡理論という静的なモデルを構築するに至ったのかということの問題にする。学位請求者は、ワルラスは、資本形成の存在する進歩的な経済においても経済を一時的に均衡した状態として静態的に扱うことが可能であると考えていたが、その均衡がいかに移動するのか、あるいは不均衡状態から均衡にどう到達するかについての問題を考察することはなかったとみている。

終章では、ワルラスの無名時代の著作『経済学と正義』(1860)と対比して、ワルラスの経済学体系における「公正と効率」という思想的問題を総括しようとしている。学位請求者によれば、ワルラスは「経済学から徹底的に、正義の問題を排除することによって、経済学に、正義の問題の指針としての地位を与え」(1378 ページ) しようとしたのであり、「公正と効率」の両立可能性やトレードオフ関係を論じたものではなかった。

論文審査の結果の要旨

『純粋経済学要論』に示されたレオン・ワルラスの一般均衡理論の性格をどのように捉えるかについては、経済学史家や古典に関心をもつ理論家たちの間で論争が続いてきた。そのなかで、この学位請求論文のような、思想史のアプローチによる一書はどのような意義をもちうるだろうか。

第一には、実践的な関心を終生持ち続けたワルラスという学者の人格的な統一性という視点から、ワルラス以後の理論の洗練化と体系的整合性の追求のなかで見捨てられてきた要素の再評価をおこなうことによって、現代理論に吸収されつくしたとはいええないワルラス独自の経済学体系の構想を示すことができるかもしれないということである。第二には、当時の思想潮流やその相互対立、また経済学におけるイギリス古典派的なビジョンとフランス独自のヴィジョンの差異などを視野に入れることによって、純粋理論のなかでの概念や構成の問題について、その社会的インプリケーションをさぐることが可能になるということである。

この2つの可能性を自覚的に追求したことによって、この学位請求論文は、副題「一般均衡理論の社会ヴィジョン」が示すように、理論的問題と切り結んだ思想史的研究になった。本論文の中心的な貢献は、ワルラス体系においては、リカード、J・S・ミルらイギリス古典派とは異なり、諸階級は同一人がそのいくつかを兼ねることができるよう機能として把握されていて、ワルラスの「純粋経済学」が規範的な性格をもつ「応用経済学」「社会経済学」における改革構想と結びつくのも、発展する経済（「進歩する社会」）のもとでのこの諸機能の結合・分担の有り様にかかわってであるということを示した点である。これは、まず第2章でワルラスの「企業者」概念を検討するなかで示され、独自の生産用役をもたず（したがって独自の所得をもたない）「企業者」の想定が、地主・労働者・資本家という3階級が対等な権利で市場に参加することを保証する「理論上のフィクション」であるという解釈になってあらわれる。「科学的社会主義者」ワルラスにおいては、「絶対的自由競争という制度のもとでの価格決定の理論」としての「純粋経済学」は、「アソシアシオン（協同組合）」運動の基礎である「平等の理念」が、価値中立的な科学の世界において論理必然的に成立することを示すためのものであったというのが学位請求者の解釈である。後の章では、「進歩する社会」のもとで、希少性が増進する土地の改革（国有化）を行いさえすれば、経済発展にともなう利子率の低下によって資本家と労働者の同化傾向が生み出されるであろうというワルラスのヴィジョンの中に、零細な貯蓄を結合して投資にまわすことによって労働者と資本家の機能の社会的分裂を克服しようとした「アソシアシオン（協同組合）」運動の理念の反響があるとしている。これはたしかに、思想と理論を結びつけたワルラス解釈といえるだろう。

先に言及したワルラス理論をめぐる対立は、それをワルラスの社会主義思想を直接に表現した規範的な理論とみるか、それとも資本主義的市場の実証的理論とみるか、また、本質的に静態的な理論とみるか、それとも動態的な理論とみるかという二つの軸からなっている。第一の対立軸について本論文の立場を特徴づけるとすれば、ワルラスはその経済学体系において、規範的な議論を「応用経済学」「社会経済学」に残し、「純粋経済学」自体は自然科学同様の価値中立的な理論であると考えていたが、「平等の理念」に合致した「絶対的自由競争」の「仮説」のゆえに、「純粋経済学」は規範的問題においても「指針」としての意味を有していた、というものであろう。また、第二の対立軸についていえば、ワルラスのヴィジョンは

「進歩する社会」での「価値変動の法則」に注目した動的なものであったが、「均衡」による決定という科学観にたった彼の理論自体は静態的なものであったということになるであろう。本論文は、こうしたワルラス解釈における対立に、思想史的立場から適切なテキストや情報を提供しつつ、どこまでが裏付けられる主張であるかを示した。その結果、上記のように、やや中間的であるとはいえ、穏当な線に落ち着いている。

審査の過程では、本論文の問題点として、実証的な社会史的思想史の立場からは、ワルラスが終始共感をもち続けた「アソシエーション（協同組合）」運動を初期の「社会主義」的なヴィジョンだけで捉えていいか、あるいはワルラスを疎外した19世紀後半のフランスの支配的思想潮流を説明せずにワルラスの思想を論じられるかという問題が提起された。また、理論的な観点からは、ワルラス理論の性格を最終的に判断するには、資本形成論や貨幣理論におけるワルラス自身の理論的苦闘をより掘り下げて理解する必要があることが指摘された。学位請求者は、経済理論の思想史というアプローチに立つものであるが、実証的な社会思想史研究やワルラス理論の再構築をめざす理論家の仕事を吸収する能力をも備えているので、そのワルラス研究にはなお発展の可能性があるであろう。現在、ワルラスの経済学史的研究は、最近発見された未発表資料などを含む『ワルラス全集』が刊行中であり、活気をみせてきている。こうした中で、わが国でも、さらに大きく発展する可能性のあるワルラス研究の一書を得たことはまことによろこばしい。

よって、本論文は、博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成11年6月25日、論文内容とそれに関連した試問を行なった結果、合格と認めた。